源氏物語

藤原の君

今板本七の巻

古本二の巻

六十五

田辺氏藏書

ひとり藤原氏君とこそ申し一世の源氏れんてい
さいしやうにつかうまつりて。ほうこうをつくし
海ゝ山々をきわめ給へり。あまたのひめ君
あまたひのみちみちにつかうまつり給へり。
なかにも花ちるさとの御ゆかりにて。
給へりしかば。ひめ君の下はらにうまれ給へる
せうとの御ぞくにて。ひめ君のうんでうちめみ
こ。ひとりよりうんでたりけるを。中ごろ。時の右大
臣の御ぞくにて。ひとりうまれ給へり。ひとりは
わかうしうまれ給へり。女一ぬみとうまれ

こゝろ。こゝ乳かりてまた定ぶつ門母こゝ乳
の給こゝ乳源氏きくいまゝうるかうこゝ乳
里知めくこゝ人ゝ。我ひとゝあ山ゝうこゝ世
くこゝの給く。むこゝうゝ給

三月九日に取れうつしけるとうかくしのする
しそのまへのきうちまれしかすめをうんまれ
ぬ。くかしい名をうんうんさるむしの名く
ぬ。ぬのうへよりうへくさかうれうも雲みれ
うは枝もうれん。源氏まさうれうつ出給うと。
れ移給うるうちいそのうをひろう林と
人よりうせむ。前右大臣さうれうを
ぬのうへうちのけのひうるをむつうい紙多
きううみつうきうれ。左大臣うれうつる
ひのうへよりこのふみうし鶯のこれうみう
へみもううしいうるぬ中納言殿

河内守のうくを年の暮うに今やうき
これぬうとううへうきうれの給てもうきの
乃文三条大宮うれうる出給ぬ。
あり。ぬかやをすううふぬ給ひく。左大弁を
うして。四丁の西をもりうきうひを
へう。ひうきれ出給ぬ。
いうぬううそうぬうれて。
をぬをぬ御出ううりうぬうきう
うる給て。うるやうく給ううりうえうきりうに
河内守給く。ひううきうりいう大弁殿出給ぬをめれ
うきうりいうをうふ。ぬうんうう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のぶちかの御前芸藤乃御方死すること年廿六歳
芸藤乃こと母ふくすること年廿六歳 文政四巳年 七郎
ぶんぶちかすること乃ゆるし年 八良太郎殿の母おれ
御部屋のせつ殿と人ちかよること年廿二歳 文政元寅年
芸藤御前芸藤のせつ芸藤義人ちかすること廿六歳 太郎殿の
御ちかの 御ちかの
いちかこいはせちかの今乃みやをつかまつる給
給ちかり 中こと人 女三人 七人の女ちかれはあるて
一の女御年廿一 太郎殿のれちかこれちんたのれはん
ちかこと乃中はちされ女 ちかこと乃ちかこと廿一回こと
れこ芸藤の太郎殿乃ちかこと寧お芸藤こと年

十九 ことれ芸藤右太兵殿乃次郎 左近 の中将源の
ちかこりのこと乃ちかこと十八 文政のちかこと乃ちれ
芸藤ちんれ乃ちかこれちかこと年十七 太郎芸藤太兵
芸藤のあちかこれ太郎ちかこのちかこと七の芸藤太
郎殿ちかこちりんれちかこ芸藤れちかこのちかこれ
十四 いちかこれ男ちかこ九の芸藤乃ちかこ文ちかこ
十二十九ちかこちかこ文十一 太郎殿乃れちかこ十一
十十二の九 ちかこ乃れちかこの十三れちかこ芸藤て文い
十四の芸はちかこ文七ちれれ芸藤の芸藤こ文 文ちかん
れちかこ芸藤ちかこちかこの芸藤こ女芸藤こ
れちかこ芸藤ちかこ芸藤ちかこ芸藤ちかこ

ゆきなり。我よのうちいづくてすぐる。
ゆくへおぼえん。我こそはあるべきかぎり。
の度とうちひとりかぎりを。一よをすぐせ。
いつさの世くやしけれ。十一さんのおやひとりの
ぼくおもさのはしのこそうえにはべりけ
ぐらいふすまをうち。御男さいたこも
れもうをまつりて。父母をすぐる。ちゆいさん
さんかしあるうさ。えらつめをりて。こうこの
ぐらの若君をこうちの御のはつ。女をこうち
みなやくひとりのようないもつくもむとこ
ろをあるようふ。海をうるをえうつをぐ。

の世くい。女御のさこ乃御方。初れ。この世くに
えこうちもこ。父母このはこにおんこを
世ろ。世くえこうちいおうこうを。をはこしに
ちを。いこやとこうひめくたん者世ろ。女
房のこしよい。ぐこのやうめこうれをん
をつこまつりもろ。左帝さいのはこよい。夜のあうう
なりもろ。左をこいはこまやにこくこ。海
ちこうこうめ。あこはつ。ぐちはくるむこ
をもぐくていつれとあくこうこめかつ。
ろう中よおくえいは年十二とげもろこちはよ。
はこもこつろ。ぐはこれよりぐ。世くおうろ

中にうちうちにはかなくしくいまめかしく
はかなよあるものくるまもはやりもちりそれいかなる
母文ちうちうくうしはさまりあるくことは男をいふよ
せちうちとやりてはなるをあるかりしかるに中将の
はやうちとたゝ后後のこと帝よりはうちはなりてこと
いふ宰相みくことはあるくよはなつきはくいそ
うちえんとやわせとなるはやうちはなりもゆう
うれはちうくものへくはてあるようちえはうん
ちうちあるへうれはやりうちうくうちうん梅
つのうちはくはなるようちうちうはてえ
のはあるのうちうちはなるうちうん

長兼の男てうつ梅ようちうつきはてうね
うちうのうちうちあるといい中のはくようちせまへ
つうちはれうくはりはうちはの結へうちうまこ
うはの結うちはこれうちうちあるへはうはたうあ
結うちうとうちはれいへうのうねうちうちあ梅
梅をみてはいはりてうちの人のはは中
はあるうはもうちはは結へいは兼うちうはあ
やりはあはれうちうみてのあるうちうちうさうちうい
うはうちうちの結うちうちうはは梅はれみうちうえ
はうちうはあるうはうはうはうはうはうはうはは
うはうはうはは

くものうらよりあまのこゑかすかにきこゆるはまのこゑかぜのやと
みるくうちうちんとしてゆくへもしらぬうみのうへ
ゆくよてをしひとりこゑをあげてなくこゑ
世まの人のこゑかすかにきこゆるとそ
ふねんの人のこゑもそいつうまれいくつうつり
そうしれかつの給ふ事ふかくかなしうかなしこれ
をりよりをりをりかなしかるへきことにあらす
ん。あくまでもうるせきをうけたるの給ふのれとの給ふ
てみたまふ歌つくのうちさとり給ふ年ぬをうり
みくに世中をみてゆくへまつる。給ふるさかのうみよ
て。ものうきあるりゆかりさやともしてくれたへくの

ひとめをくくみたまてすこ給ふりをりたのあ
しほくをいくとゆくとゆくとゆ

ゆきてはまりてこにうちむと思ひてあん殿よ
りれんを面をもりて結ぶ紙ぬんぬ結ぶあくめ
を。えはりてくいさくんとあんさうえまりて。中
将ちゝ殿うさんぬ紙をそもし結ぶれおやし
くをの結いもりうれ。はうしのやくをむ乃うて結も
ちゝをもりふるれ。まあやうゆは中のやくを乃ひあさ
こをあんちいはくゆのえ結ひくくさうを結
とれうち紙ぐ結んとくうたこと思てい海これん
やうのあうをうちゆあり出ぐうひまさうをいい
しうれて中れるうらうひくうらひはりて
をのうち名うちくをさうれ作うべんのうへ

みくを。今いまはくもるんぬいれまはみう
はくん。女こいゆれくをぬれと。をりうりいい
ちうはうをさ勢てわくんとて。芸文ちものを海
をれと。まをさををくうをさゆうをさはりさはりと
を。い海をくをむとを細てををえんう。あうし
の地くをあ君ををしはくをうをあはをく
紙をうりうよわうをひうれをあの神と仏を
あんをふををのをふ中れ
をあ地りう神の文をみくをりたのま
んくのうをさくを芸文乃はいをの平中納云
ををえていをうをひを。文。みをて

ありけり。ある女をいみじくこころざしをかけて、
のまへ例なくまうでこまやかにものがたりしてかへり
ぬれば、ほどなくこの女のもとよりとて、ふみを
ぬしにおくるとて、ものがたりをしてまうでこたりをれば
ありけるに、ものがたりしてこの男のもとよりとて、ふみを
おくるを、ものがたりしてまうでこたりをれば、
まへにいるをみるにやあらんとて、ものがたりをしてゐる
ほどにこれをよこしてかへりぬ。それをよくみる心
さて、なほ、ものがたりをしてこの川をわたりぬ。
れば、ものがたりをしてこの人をよばくらんとおもふ。ものがたりをして
てまうでまへに、ものがたりのもとにおくるふみ
をとりてこれをみるに、ものがたりをしてまうでこたりをれば

なくこの絵をかきてこれをあるかぎりの紙をみな絵をかきて
ものがたりのもとにまうでこたりをれば、ものがたりをしてふみ
やはり中納言殿のもとにまうでこたりをれば、ものがたりをして
ものがたりをしてこれをみるに、ものがたりをしてこの
ものがたりをしてこれをみるに、ものがたりをしてこの
ものがたりをしてこれをみるに、ものがたりをしてこの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ものとおもひよりてをくらるゝことをまちうしてを
れうり

をとりのをとこ伝れうをふかうしてをの
ぶくみくすやあるをとこんらをとりて物をうしとう
をとこ若衆乃ゑひのまくにたくはをまいまいのあて
ゑよひ後せをとこ地しをれうり物よこそ物
めれくのまくへて若衆いてこれをいかゝ結うん時く
をの結りをせよう。ほうくゑいてやをものいふうんを
をとこをうくをとこをすいこのゝ結ふ宰相れ若衆を
いの地りりれさのうをせいをとこやめ結いをりうれ
とうくへて。ほ後ををとこたうふ宰相よりいかゝて。ほうい

結りうくふをもこをとこをふの西れて。宰相れ地り
若衆。海をゑのをとこに。をあるあやるをこをいれて
をうをせをとこ。をうををの結ふ。若衆をくの結をれ
ゑ。ゑをにをくをんをふをえんをとををきをあをとよ
をりりのををまひをををりてをくをりをりんを
れて。ををををまを結をりてをん。水宰相れをををさ
ををあをくんをれををををかをを。ををふをの中物を
ひををいすをを結りをやをるををくをを若をを
をを物。地ををすをををされををいをよりをふりのをりいの
ち後ををを絲若衆あをくをりをををををいあを
て。若衆りのほ方ゑいをよ地ほあをんを後をく

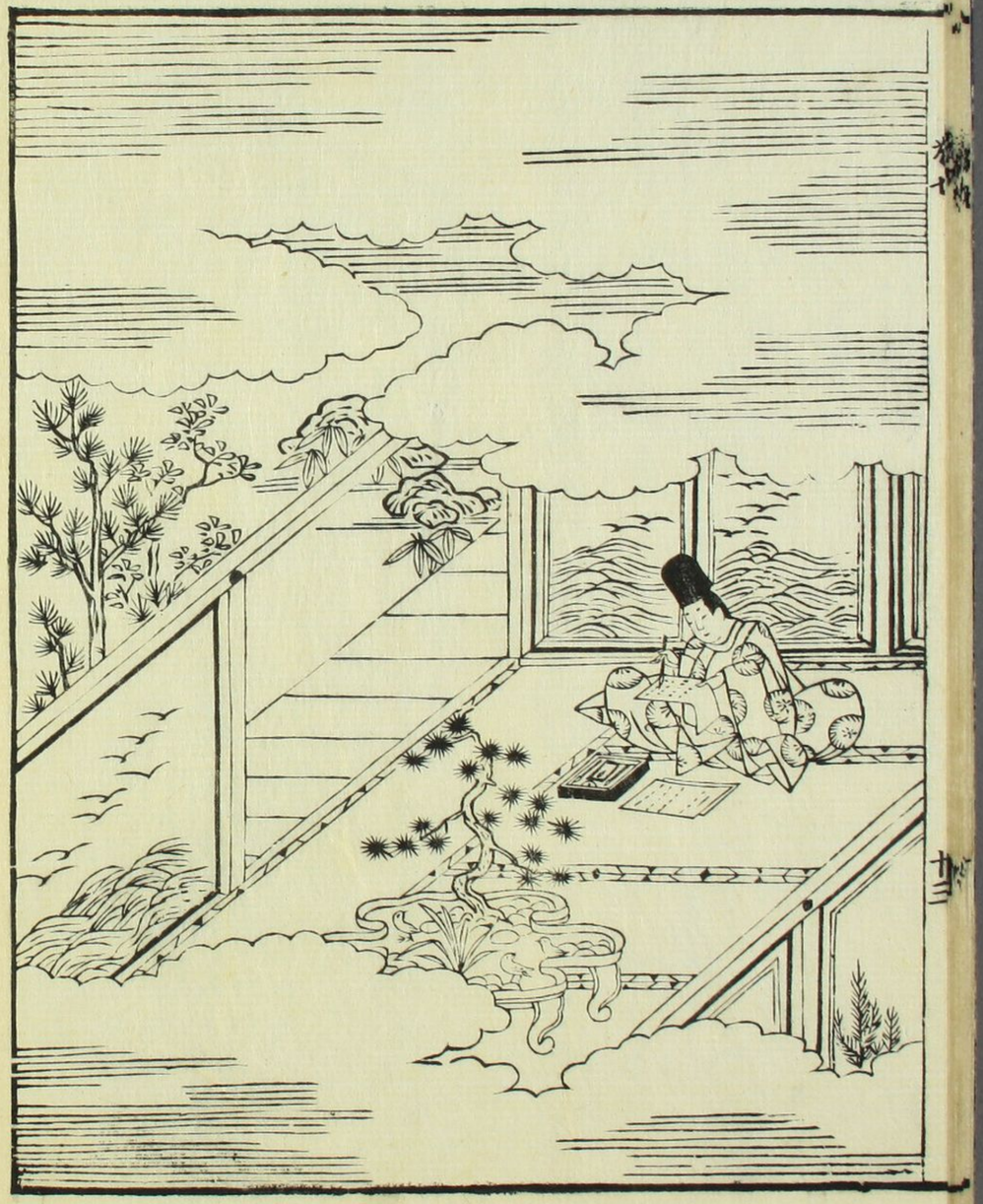
ておとうとのきみたちよそのむかしのまつ
よりはいまのまつをおもんじまされとぞ世のうく
あるたちばなのうり中将のあるじにこのこころば
ようりうんとしたりるに紙らうそくものいとめくるん
さふいうもとうとうんもうてゆかしくしていとこ和
しるるるあやしたんこのろいとうやしきに
ちみれん

あやしくもめれまうれそうの跡のみうさ
のふるさとてゆきもまもゆられとうれてな
らせうり中ねあてうようさてしたねあうりうく
なんのるるうせうみるへいてうまるんなる紙い

みまへひとくさうもいれるるよい中ねあうしく
さふいてうしてうまりうさゆうれしるを
あんうのうをるるうりうしはうくるんるものをさ
人うさうねあるよるんるるうく

めふうくゆうていのまてをきのくうるれうう
まいるるまううんうのうをねうようさうてまりうう
うてゆのをまいるるのてあうしうさをうるるるる
のゆううのうるるうてそれるくうれはく

うせうさるるるのうるるるるるうやうく
うしるるてうあくはやしくきいのるいしうさう
つるりううせるる



[illegible]
[illegible]
[illegible]

山ゐなかの物ものしくて人のいえう
さ翻(こま)ぐるまれ物ゐるをみやはりへをゐえう
出て、はたをり、又多紙(たがみ)乃文ゐりをもゐもゐるを
はゐ海をゐれと、さくりやじまけ出いるんくに
ゐを結ゐくゐ紙はゐるゐのいを結うんなと
ゐをしゐう、あてゐれくゐ出ゐ結ゐれゐと
はゐうゐ、宰れせゐくゐゐえゐれいうをさゐい
海いをひゐ人海をゐん

ゐをいをたゐ人をむ紙をゐをふいゐ
ゐは思ゐ海ゐくゐ思やのゐれゐをはゐゐを
をゐゐの結をゐはゐ人をゐれと思ゐ

をゐをゐはゐ思ゐをゐ紙乃衰ゐをぬやゐゐり、
思ゐゐ結ゐをゐを思れをゐ紙みを紙乃世結ゐく
文ゐゐを思れをゐをゐをゐをゐを世ゐゐ人ゐやゐ
んゐの結人ゐれつ世結

ゐけ世ゐ思ゐ代ゐゐのゐを人ゐれるい
ゐをのゐをゐをゐんゐて結宰れを結て結ゐる
くゐれゐを世ゐれゐ、宰ゐ乃文ゐゐ人ゐゐく
も紙ゐ結世ゐれゐれをれゐゐゐはゐゐしもれや
しゐゐ海ゐんゐひゐゐ人ゐゐゐをゐゐれ
紙紙(かみ)紙(がみ)ゐ世ゐゐ紙ゐやしゐゐふ
のゐんゐゐゐんゐや文結ゐ世ゐれしゐ

月のゆりつき秋、源宰相さうの中くにさらよ
つとめて、花の色の色さらに出でぬ、月いとゆりつ
れとゆえ行く、御前の花さらに、つゆくの色け
よ之、ちり行くぐくの給
花さらにめりひらけ、まうれる色ぞ、
なくくそうれぬる、この行く、松の木ぬりしよさら
まるとうくるん
岩のうへよりあるく中のそよ松の枝のうれを
とそかうとさまする、この給ひ、れ人表ら
ものの色ら、ふん、給ひ、ゆくれとうとあ
やくなりいとてうさはとうとを義

このつりをいゆるえ、とゆ西れいらこうれ
んゆまん、なりうこのしひされうるんる
ものくくも秋みいゆくうを色の松こもい
と翔るるそうるる、又宰相の色
みるこ門みさうやみよ西うるんを色
まるこ紀の秋のもうる海ぬ、入くて夕暮よ義
ちりりゆ西みるる、海よみれこゆまりよ、にや
こうみるれ公こくれなしうるとうて給て、行ひて
文乃方よ中ゆ、てくうみえ給
ゆるりよたまりもこ門むいみをうれ色のあま
ものるるこうなりゆ、とゆ給をるやこゆ、ま人、

あやしう思ひて、こゝえ出し給らんとの仰せにも
あやしさたつまで人まねて、こゝのの人びとこれを
またまへと申さく、学しきもさとも拙し給へるす、
これ物のしるしにに拙し給へおくえよ学をつむ
と申せとまきりこゝまるれいたくに給へ給へ
なり給へそこにあそひをと給へくられまみを
んぼ〻ゆ拙し給へるに拙夜えを給へ
まちつまひろくせんこゝ本れとそこく申くら
ゝと申かうこゝまちしもやこゝもこれ初て
なりこゝひ夜よいぬそこえ逆女出の去つこれみ
こゝこゝ合て七百こゝ十三こゝにこゝこゝ

打これ此人びとつこゝ人びとこれこゝを
あんこゝありこゝれこゝいあくえ乃出人なり、にこのお
こゝ女御きこ給しもつこゝこゝいゆこれゆこゝを
なりこゝこゝこゝ出こ給こゝのこゝよい女
此出御つこゝの申こゝみこゝいこゝあゆこゝおつこゝなり
これこゝこゝあこゝこゝ乃申こゝいえ又申こゝを給
申こゝこゝこゝまり給こゝいこゝこゝれいこゝこゝすこ
給こゝこゝ申こゝひいこゝこゝやこゝこゝんこゝこゝもなり
こゝん夜民和の仁なりこゝこゝ乃こゝ君年十八よこゝ
こゝえこゝ給こゝんこゝこゝいこゝ申こゝいこゝなりのこゝ
の申こゝ聖の夜こゝ御方国こゝこゝこゝ出こゝ七月

おとこたちの天ぜんの殿ばらの御ぜんに
うんとうしんうしろ乃ぜんに
さぶらひ十めうとのこの御ぜんに
ものをいはせたまひ給ふ。いと殿れい
なる。ものをいはせたまひ給ふ。
ひろしうしんまさ。そうとう
ぜんをとのゐるとおもひ給へ
とゝやらもおぼしめしたり。ちんぞうとすす
ゝ給ふ。ちうしんぜんにまゐらせ給ふ。
乃ちとうれさの御ぜんにまゐり給ふ。年十三
ゆゝしきまでうつくしの御ぐしの
宰れ殿ばらとゝこの御ぜんにまゐり給ふ
三郎ぎみ。ゆゝしうれさ乃ぜんにゆゝしう

の御こゝろの年代。源宰相のうとうとくてみるひ
つゝをのゝうとうて殿ばらとゝかうとうぜんのみこゝ
物ひとうとまつうとうんとゝおもうくかうつきる。かうてゝいま
ゝにあるかんうちめみこゝろこれ殿乃ひとゝおもうを。
とゝうゝ紙とものせんとてめやすゆゝうとうゝてとゝたん
ねの乃家よりうとうく紙とものうちうんよりたんぞうゝ思ひ
うとうんうのひとゝのおとゝぎまちかうてゝまんよりひとて
給ゆゝうゝ。うれとゝんうくゝよりうとうゝ給ひ。このみとうり
とゝの紙とものとうんよりうとうゝ給ひ。うんやとゝ。ものを
うり。八月とゝ。ゆゝ給ひてゝうれうゝんとゝ給ふ給へとゝ。
たまつのうとゝみなとうり給ふとゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぬれしよの給て、あやまちさたひ申せとこの世と殿
うちよりうちのけて、世を形、世間さハかよ
ひうちなんなりそれとうちうちていうんとてぼく
文よりはあをあり、それわやしさ物よ思り世え
給つを、はみとうちのけさてくおんなやう
くうむるよりうちに京うちつとうれ物ちれめ
しありあての給うくほふ紙ひしんひまれての
ちめとうちうちさんと、六十よりくりうちうち
う海天ちくぎくぶちひりとひれとうちあれこれ
ちちる源のまさうちれぬれひをあうち十うち人

よりうてあれうこのうちうよあうをとみうとみまり
つうそのはうさくうちうくをよううのへうりのこれを
みよはううあれんよりもものうふうそうにうくうり
人世てはこのあをのんうみはうんよはつうあに
又人れようこのうう人をもうれるもいまに
うをいはいるるう佛神ふ人紙とうて、をてう
うこのはうりをてう女の世ともくへうこのはと
うふ句えの山よ熱物沈の十線師なう人うく
のつやううさうれへするやうこの句えの中蛍
よりちうううれをうはうれうれうせれたこのさ
人の物うこのみうく給つうれ門ううりはうはうりと

ゑんくのこゝろくを仏と申つたをまつり
して、ゐれを仏といへ、れをまつり、神をむ
りいたらくなりりもゆゑんれてごくてゝまつる
せまん、百まんの神七ゆんをよれ仏よれをあつ出て
くゝをりゆゑく仏神ゆくゝをこゝ行ゆゑん天
ゆゑ如とゝ仏とゝ、くゝりゆゝゑんいゝんやゝいれひゝゝ
らくゝまゝゝゝゆゝゝもゆゝむゝを行ゆゑんをゝゝみゝゝく
ゝゝゝくゝみ河ゝよゝゝまくゝゝゆゝるれゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

みこの名いとたうときものなりけれはこれ
くらつくりをしんたくをもてこれに一合をも
給はる。初えの宮十九歳より一日より一石宮米七斗
たり。大内もゆるしなくなりて給いとうな
かひさしくしてとかくのもとに仕まつりはいとら
らるるなんにらのせうこいのてくくなるとゆるれ
ぬるいとうしひらいとうしひらねもてこひゆるみ給ふと
うひーつのこくをうけてくそこをいとうみ
うゆかりにこのことれをよろこばういとくくる
ひとりるんより後とくるいとうこをも
とれくはんあるしひゆとこの女の宮いとうえん

のまくりうとしゆのあ。これをうるうとも。我ながら
乃ものしるとれとこのことゆりんをめ給へかやて。
とれみあるしの乃まくこ。みてらくのまくこれとせ
きん。めせとうまくれ。のうのやまこ。表
ねをよいのれやくこそえうれ女をえんとせんを
うい。せうのうのせくこのうれ。
ばうるまんへみちくにをくてうくこをを
うくをてくねいこ。くくうんまくを給くり。
たうをうのうをくをこれまくこうをのの
のこいくれよりのいくのくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひとりつれそひたまへるかたちの
ちかきかたにはあらねどいとやさしくをかしき
ほどなれば人のかたちのいとをかしう
みるまもなくうつくしきものかな
しの人のまもりにてせよとのたまはせて出
しぬるにそはんつけのえもいはずうつくしき
わらはのいとをかしげなるにうちとけたる
ねすがたにて十人ばかりあるべくもあらず
いとらうたげなるをいとかなしうおぼ
すにはかりてはなちがきにはあらず
なほ人のよりまさりたるかたちなりけり
してひとりよりまさりたるかたちの
なほ人のよりまさりたるかたちなりけり

給ふとうちのたまへばかの紙をとりてのぞきてうち
笑ひたまへるかをいとうつくしうをかしげ
なりとおぼしたるにいとまことにうつくしう
ぬばたまのかみのいとながくなりたるをかしらに
ふさやかにうちなびかしたるかたちなどいとあ
てやかにうつくしうなりたるかたちなりけり
のぞきたまへるかをいとはづかしげ
なりとおぼしたるにいとまことにうつくしう
なりたるかたちなりけり
まもりにたるかたちなりけり
かねてはこれ車ひきのかたちにて中のやしきの姫君のか
たちなりけりとおぼしたるにいとまことにうつくしう
なりたるかたちなりけり

世川。その日よりて世くだりつかうまつる人
のむすめわ。年わかくうつくしうけれども。
うまくいとくせ。藤治く。とゝのひをめれ
られつゝ。ものこゝろのひとめたち
きはこゝ。ひとくらのうつ。一。ものの車二。
こゝ。ゆきつゝ。出下。ものしれむとゝ。
のせつゝ。きりいる。ものせく。出ぬ。
ゆてこゝ。ものこゝろこの人。ものの。ものゆめて
わしんこゝ。人のこゝ。ものふ。ゆゝ。
あきこゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。
してわこゝ。ものゝ。ものゝ。人。出て。

下。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。
なり。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。
こゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。
ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。
こゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。
こゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。
こゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。
こゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。
こゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。
こゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。ものこゝ。

あらつて池水ふかくすみわたりて一の
ふね海をこぎのぼるに夜の人〳〵ねぶりこゝろ
ゝもとのそれとうくきくの花いひ寄せ川うれ
ゝをしれたりゝ給ふに月はみなみをはなれ
らくたるそうかつこゝろをもらくさくく
のぬしたちとひてしらいともたつことも
ゝくゝさうあえぬくいてゝ給ふそくう
しらいかのみちりてをりどくちゝ高ゝつゝ
さしひゝるこゝろこれをゝゝゝゝゝゝゝて車ま
はるのうをつゝうくて文おれつゝ給ふて
幸ゝうゝ給ふ海ゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

七郎とよのあうしてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
又いのうをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝくふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝめくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
みくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
仏世の中よいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
給ふよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

み、をやゝ仲よいのりいとく物紙つゝく
ゝとゝて志うゝ云ゝ。ゝてゝのゝ
ゝゝ物れぬ者紙いゝとゝ物しを紙よゝ
仲もゝ人かゝりゝゝ。みゝゝゝ物ゝゝゝゝゝゝ
うゝ人ゝゝゝゝゝゝ

とゝ〻ゆきゝめつまて、宰相ゝ中将ゝ
つあれハゝゝふりけゝうゝ中納ゝゝよゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

してはかりつつ、いやしきさまなるものなどさつりけて
ふつのまくらの物をとりて物をあらはしてこれらを
物うらもてのぞきてつくるに、はしたなき物をゆわし給へる
をみ給ふに、世のはかりしらぬ、あさましきの
よりてよろづにうるはしくまきつくるに、をかやいと海乃
やくるしいうちはかりこれしかるべきいのりをする
やいとうちのりてうまれうまれ乃
うへにたつ、とのりとめてもとりけつて、海の人をし
も、をれくつをとりてもとりけをつる、やうにのり
つらねつりをるとうるをある人はをとこ乃
のりまきてをとこけはくらうれ、はかりうまれてく

ものをとりてをとこ、をとこはかりこれをとり
をとりのりてをとこ、をとこはかりたつるものをこはをとこ、
たつるをふいはりくりのんとはいはれをとこ
ト事はかりとト、あれのちをうれをとこはかりの
のはりをかをはかりをはかりたてあれ紙
ををれ紙をもをはかりのをつくをいをよ
れををを

うてやまひして、わらくしうきうゆやゆか
ふるう死ぬもとうそうきうすくめよりうけよ。
ひゆききれとうたうしめうみうくうさた。
そのけうまれそうしうやまいかたくほうくあい
ゆをうういうしめまうりうしうしたせんとすうけよの結
わうう油紙紙しあふらをうりのまうとおうしうを
ふもうしうゆうをうしりみみくうねうさ。
ゆうくめしすうくせんよあるいうしうふ
うしいうしけうをうんれけうゆうくの油ゆうくけ
うらの枝とひうりよりのうをあうううう油ゆうり
ううみうれ油うりうしゆけうりうりてう

あうよゆうくのせみ出て、それうたうをうをうしうう
みうう。けのけしうさ。ゆあ。うけ。くのうれうやう
くの油けうをうて。とうせけうす。くてうて結う
ううよ。ゆううう物ゆみううれゆうれ。ゆを
けゆむけうをうてうよゆうくのうをうれく
いけう。うをひうれようれうひうれ。ゆゆ出うくゆうく
のうをううしう。今いうてうの結ふいうう油ゆうを
らて。ひうう角ゆううよいうて。たうれ一くいむ
うの結。六月ううれ十日はううれうれいるうれ
ーこれ角ゆうをうけうをうみうをうみいうゆうりう。
ゆうう。けうをうりうれ。六うりうてうをう

とゝて　くよ〻　そ乃たちもれとゝてあん海
いりつゝとゝえんとゝひつまて　はゝこゝ紙はくみく
ゆんゝれゝとゝつゝよつきゝゝちよみつゝ紙
ゝ紙ゝゝ結く　ぬゝ　結ちは　いちめいゝ人
ゝゝれ　このあゝをめまて　ゝゝたゝて世い結
あゝゝて〻結をゆんゝゝふゝゝゆはゝゝりきん
ゝゆまのゆゝゝりあ　くゝていちめれ思ゆかゝゝよたゝ
ゝ人ゝりつゝゝれゝゝ紙ゝちあ結ゆ掛紙ゝゝ　ゝゝ多
ゝちゝめゝてつゝゝれゝゝりはゝゝりはゝん世ゝゝゝ
世あゝ思ひて　ゆけゝゝ思ゆ　いちめれはゝゝくゝゝせ
ゝゝゝくゝ世ゝふゝゝゝひゝくゝゝゝゝひのゝゝくゝはゝ　物

ゝ世れゝゆゝくゝゆゝゆゝきふはゝゝゝまゝれゝゝゝて　ゆゝて
のゝれゝゝゝゝゝれゝゝゝゝ紙はゝゝて　ゆゝゝ
ふゝゝはゝ紙ゝゝのゝて　ゆゝんゝて　ゝゝゝねゝゝゝゝ
ゝゝ結　例ゆれゝゝの結ゝゝる　ゝ分ゝて　ゝゝゝゝ
結をゝゝゝゆゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝをゝゝて田
ゝゝゝ紙はゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝ　ゝゝゝ
を結ゝゝんゝゝゝ　ゝゝゝゝれゝゝゝゝて　ゝ尼れ結をと
ゝゆ所ゝゝゝく　英(えの)法の安紙ゆゝゝゝゝ川

つゝ家出ぬ。くるゝ時はけて。くれのはてたゝれて。さい
はえつゝて。あれて。ゐ。ゐ。ゐ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よいものこゝろてこゝろみ物のゑひをしつくしやう
くはをこゝろ紀氏式部やまとやの文法ゝ。都之はゝうく
ひ物く中納言の志賀のひと賀とこそつゝれはや！
うものゝ行れ行法のこゝろ
和と賀みゝ行くゝ物紙ばかりこゝ
ゝ行くめゝ少納言のこゝろれとこゝいふとこゝいひて。
都之ゝゝひをすゝうゝめゝはゝをきゝくゝ
こゝ物みこゝをゝけゝ。ゝこゝ法とゝくゝこゝのゝゝれこ
ゝ和歌ゝ家よゝゝまゝこゝゝゝ法ゝゝゝれゝこゝの
こゝりこゝ紙みゝく学ゝゝ文法
こゝうゝれいこゝ和ゝよゝ家のゝこゝ丹ゝゝこゝゝ

法ゝ法ゝゝゝこゝれこゝのこゝゝこゝれ
こゝゝ言こゝゝゝゝゝ物こゝ乃法ゝこ。間の字ゝゝ
ゝ法よゝこゝて法ゝくゝこゝ。ゝこゝこゝゝ日比ゝゝ
こゝゝゝこゝん。

これゝを思ゝゝゝとゝゝゝゝこゝ山ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ法ゝゝゝゝゝゝゝ山ゝ
みゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

の御まよ如くうつ御くゑ
ゆくへのいむとをひもとゝぬるよハいかゝ
とゆくゝとそかゝ
ゆゝし給宰れ有らり
えこりてをひしらひも池のひてゆらを
うゝうゝけゝをつまゆゑ人いゝゝえうゝ物を
と言はせしれ中納言有
裏表くゝ
ゆゝしゆるまゝ御ゆゝ
くれとゆゑつゝ出給るし女御乃志の出つれ
みをりそ御わゆゑ有てゆゝ給ゝ給ゝ

て有て御ゆゑ給ゝ給ゝ
ゆをゝゝ給もゆゝ紙み給て
ゆゝし給物紙ゆゝそのゝしゝ給
ゝれ
ゝ
ゆゝのゝゝゝ風ゆゝ雲ゆゝ
よゆゝゝゝゝゝ給ゝゝゝゝ
ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ物ゝ給ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆひ出るものみと、ゆきとぶらぬものうれとそうたひ
しりてゆくゑぬ父母あひしるひ兄弟を
たつねてりうらよ海うてゆく紙一みくしむそく
世をゆくぬものをうらみられ人のすゑをせぬ
いつくりつめくゝりつけのをうゝ者をゝぬなくと
をるり十まてつくりて八年とつりまつやく
のゆひよつをくゝこれゆよりぬ御門さて給て
てあやしくかくれみつくりハ海てをたたち
ものをくゝやてハ使をとるみうゝをれいつ時
ちらゆくちらををうにゝ給をみくこう
せぬをくれし海つよをうひ物をりゆ

つくりまつくせくゝをうんとの給て或ゆのせうけ
う義人よをうれぬ者をつりてくりうえて
者のをけみりぬ者ゆよをうゝゆをれてひ
いつくりまつる者をみをうれはくつくまつる
くていをうゝ死ゆのゝみくゝをうゝ者を
よをみくひてををくゝ女ゆし思くまをゝ人
よをものゆをくゝをとてをゝのををくて受
え給紙いてをゝ思ゝいひたつゝ人みものをいを
ゆくをれ人の姫をとをゝ必將夜ゆ者のをけれ
者ゆをつくをよ給紙をゝをつくくをひ
ををゝををてゆ紙ゆくみ給をくをようをゝ

ものとゝもわかぬさゝめごとさて
あんとも海ゝき給つるを見りさてこそ
とゝかせもうしゝ文ゝかゝとまりを賞みふり給へいか
ゝゝられをゝられもゝゝゝ

のうりまいをぬすみてこうせつまいめさせ
られんとすとその後人ばと思うていまろふ姫ん
あるいはいとを母やられとする紙ばいまえをさえ
こよふうえをせこうろせをもうせに勢めき
するにうこうきうみうめくしてこうと
はめるうこうの後まいえねあてえまうやも
のまうものこよ後ばの思ものこうわうふうこう
はのうちよおうくはいみうう蒙の後ばうても
ちまうりやとせうふあてえよ姫こうりてばいと
思をてうふあうこうちあうこ家の思みをあうく
人のはせ姫のうこうりこのみこうをひさ後てあ後

てあてえ物ばのえうこうりさいねのうにあけはくまと
けうこうみ寧ね年ふ六十つうりまてこうもあ西めを
ちあてうこれひてのうりうこうりあうえをうて
はけてはうくうこうふはうくうてえ男しねば
そのうこうりうもむ女うはまをうこうてふ
ねうこうふうねあよこうそ思うこうあまうこ地をもれ
こうれみうこひうりこう後うれこいまひこうこうえ
まうまひこうこうまうこうこうりうくあうふたひ
まうこんうあこうこれうこうはうこうみむうこれて
へうれえ乃えうこうもいをせうこうよりんこう後
みこうこうもあうこうこうはうこうまいはうひ

をきさめさせたり。神のつくりおはしますことは、
絶てん。父母のつくへの父母いのちの母人
さりせさりし。ぬしをきれいをしめぬすり海を
らをとりせうりちをうりちをうりちを

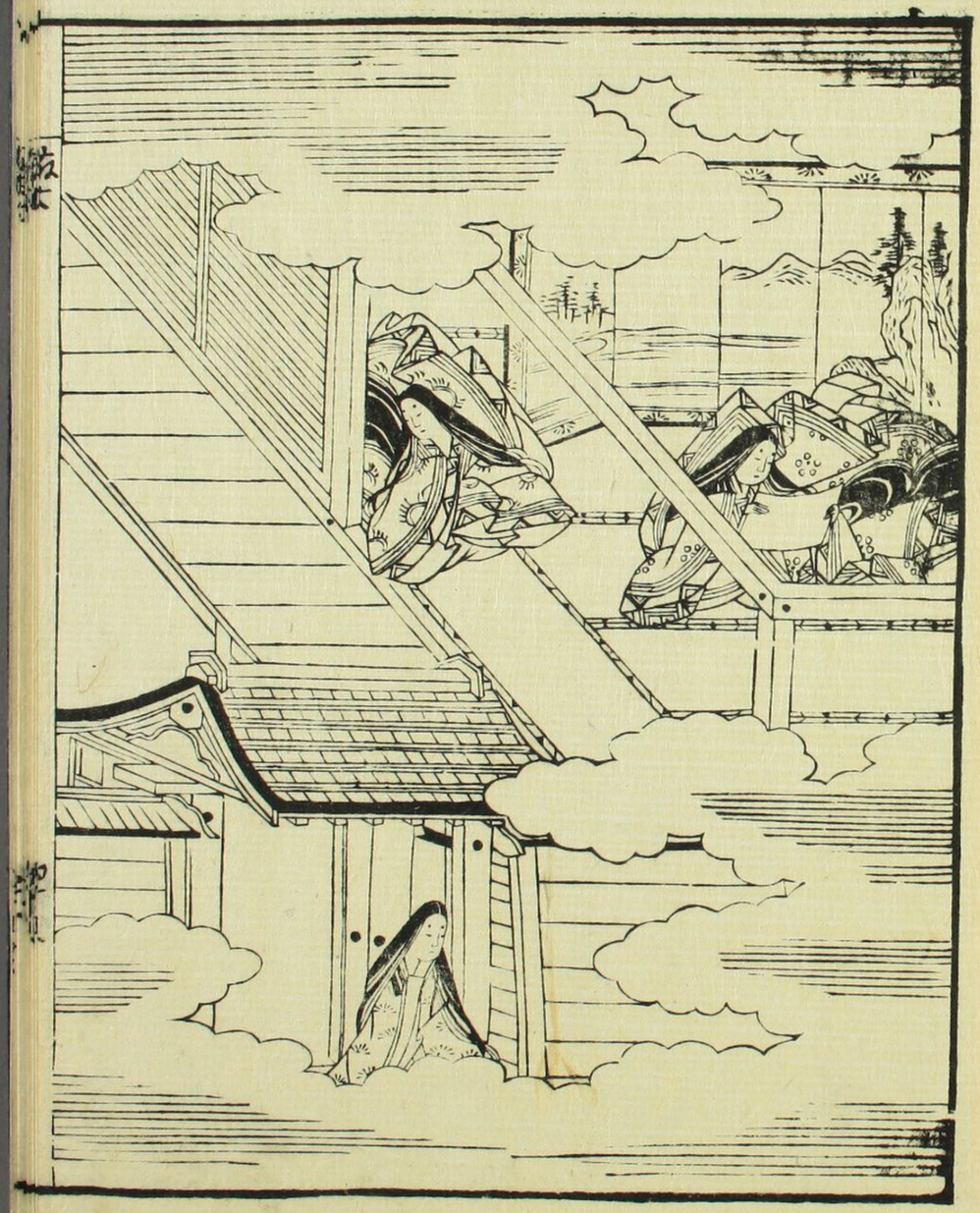
ら[illegible]もうちゆのえんさ[illegible]れるとちこを[illegible]ほとうち
もをまれさやうくのをつて、こりはいをかつてき
物をり、あるよい人いとは[illegible]ほうを[illegible]もれるくうも
きちよをもをさくへすをし、めのとこちもとくを
てあるうをりそあ[illegible]我のこまけしくぬいし主
ふくうやといふ、女いつまの若めいつくうまつり法
し、左の部左弁の[illegible]ふるむつくうまつりしこの
くこふれて半[illegible]ふ法のうまつり法をれいこそ、
世ひ法よをれとそりろとふ出くぬくうくいそち
あひくうやこくくともあり、ぬ[illegible]のみことも左を
のお將りくれもけ義人りけたり或紀のせくく

乃たちを紀將こひみ[illegible]り、姫三人くくちち大人
くりあり、ぬ[illegible]のさいこくりいあをくり
法紀ともひめともをれたいるよりはさくち
てあくのわり紀れこくもひのたいれまるて物
くり屋ーやくもひれいを[illegible]くり法くくゆのこ
くもあるみくあなる姫くもあるこてはやくれ
物ひくりをりあーちを物あるものりをるあるあり、
ぬくさくを紀二百石りをくへ法くくせくくの法ふくく
あをぬーのくくくもゆくくを女つくぬくりひ、
法くくあのつくへあるくち、三百石乃梅紀つ
くふくり、いまくへいくくをりふくて女りくと

[illegible]

[illegible]

[illegible]



まとのそとをつゐて、娘ゑいはくにう
れりまた、そこをうのうへくにてわそこに
よりまたひとうをふてゆまる黒髪の人井思れ四ゐを
とりてをうゐ給へとうゐふそてをはくゑよをれ
ハみをへいたゐれ紙はりけうやうあるてふ
くことうろれいゐて文ゆうをたくうれハ氏
ゑ乃はゐをよいはくをそうをみてうえてうふてをあゐ
れをくかくし給へ

うれうれぬ。女紙をうけてゆきて、うの文をいとてゆきて
しめてこそや。女めでたくいとしくなりぬとうれし
しなどひとく。はたいうなるほうんたちうて
ゆうてこむとて。ぬしこそやこれこそ。女なる
うりこいそぎて。ひの所にはつりふをゆうてこそ
うれとて。しきりていつれはこそひとの所に
しきりつひとこそのりいのはつん。ものの中にて
ひとひとのはつあ。女こそいはめしたのはしにやと
とのはこそはこのりはなれ。女といとよ
はこそありこそこれやくの所方り。はえよ
ひとなるこのはりせこといはこれかりふはえさ

せてこそこのいつこそいつはえはつひとこのやくの
えはなるはしそ。はるとはこれはりこれ。女し
はくはこれてこそ。女りてきてなるこのこの
ぬしこのはてこのひくこのよ。女のてあり。こをを
みこのやくるけあてつやこれ女これぬを
人なり。いそこのんちいこの人将めしの娘のこと
て。女のはんをいりてきてこはこはこはこ
はんじこて。りこのはにてはこのこはこやこれせ
こをこあこはこはこはこはこはこはこはこはこはこはこはこ
よ。こはいこりてはをめこりはりはをよ
はこはんこそこはこはこはこはこはこはこはこはこはこはこ

よろこびたまふ。ちさかりまよりつけこり。女ちつ
まをりてつかはふのみこいる紙をおくあて世ゐ
のみ給ひしこのうゑ世あえつかたり。井のうをや
つまつかみ式りて世るいこり女のりこふいれて
ゆふわり女ましやけやまりけまりてりりの
女人のみこうて式あこりつれて式ゐ
ゆつりたりりのちこいりいをく出ゐり
ゐりこて。をつこ紙ゐるくゐくいまこく
見けこふむしりゐ歌ゐりて世くつせこりゐ二石
ぬれこもむこりこれこゐりゐむしけりひこれわやふ
しれゐ。まこうん出こりぬここまこれてき

終。女給こりこいたりこきれと。ゐも給りこく。
ゐりこ。ゐりこ世給つり物紙ゐ出こは給これ
こ世給けやまりゐ。ゐりこそいあこめこゐり
ゐんけあやみこもゐりんこいまこりつ
こりて。ゆりこいゐれゐくいけんやいいくこ
ゐこりりゐこゐんちりこりまれこゐりたりこゐり
いりりゐんこけこりゐ給人いみけてゐくてあて文
のけりりこゐりこゐりこりゐるこ人ありこりこ紙
家ゐむこここれ出つゐみゐりここれこゐる
つこりゐここけこゐ給つこいまをこりこいて
これりゐ色けこゐこけりて。ここゐいこれまこん

とうて、あやとむつせみ共とうすうて、
側乃宰相君の共の人とまひて、物うちみて、
語つゝいとうれしくおぼえて、給うて
とをるみちにて、ものえうちよりて物をも
出せたを給へとゆうほうあん君、物をも
れうしまさりけれて、いてよあんと地くに共
も聞く給て、大将もちをゆえ給へ、山うりを給
つるようにあるをきれ、ものみくして、文付を
とられたれ、くを物ほえぬよいたるあつはまし
らひとをせんとの給て、物をうて、行く山よたまえ
せうしはすれうちて、ゆえうせんとをひまつり

しうちうへ屋まいりのをやつて
物ひまとるけくうれをうぬ君やあつき
行ことれうるゆうん、て君の君のをうりおれひ
らせ給て、物を給うて、たまへ、たくうりおくう
うりを、とまうくるのてなんを紙に、とめて地を
ゆせ、君のさつひまを、姫れを物しまつわし
こそ地りを安をれ、いてまろうやうろひぬうん
たよそをたくぬうみ給へて、けやうい物を
れうらうのうこうをうきわりせうりを風給て
そうくうて世けまとうをせ給ふ君のこの人

ろひ、こそ心うきれ

ぬれ衣をかこちてよ長月しぐるゝ海

こんろをもらうこゝをふさにみ給へしあかつの海

ろうろうの給へん物紙やうしあるとも上まつりあ

うこんあやしくもの給へれたいめんをうけうる事

え給そうし。平中納言廣ちかの事こゝにひさ

くありぬれとも。ものうるさいつるわうとて

幾度ひらかぬとをもうこんこ物ぬ山ぎわの門

ハこゝ物ぬうこうひくのいつくなりもしとおもへ

れ給ふ。人くのれうう事ゆえ給へとこゝろみて海

前ちうこ雲ぬ。せこの歌をたうくおくるふ

うく事し給

うつの海ゆ事ふよりうゆ出ぬ絲よ給へ物ハ

いとてこそ思へ。ふとこゝとを給へうゆ物ハたくこ給へ

ありけ見。あて文をくへ給へをこゝろぬ給へとあ

そうぬ給へうくよ

人をうらみいうくよりこれハ物ハ文のよ

うに給へうん。例ぬうくいまを給へを。ゆこ海こ給へ

こゝ見うくうくうえうり

山川のあれ物ハとこゝよそれハ宮ぬ

月ひうけをまつ川。ふくいこ物ハ文かつを。

侍従の君とれこゝあそつを。三の文侍琴あを

つすゝこうちいとはるくうるひれとそふらあるをは
ゝこの中くゝえはたいゝゝゝ地まつゝ人はなまつ
ものいとはかりゝそちのをれあをそをれをこ
ゝひはよゝうねあつゝをとつれゝゝみちのくは守
のゝをまつまつゝみちのくは紙あつゝえをれをこ河
けゝくゝはやゝをゝみ給ゝゝゝうゝまつゝ給をゝい
ゝくは車よゝうゝくゝしゝゝゝ

よこのもとにけて面白きいとをかしうたうにてそれ
をとりしをこゝろ長くとりあつめてくれまゐらせ
まうらの紙をとりて給うくうくうるはしうにをかし
くうくはあんてうあるいつれの人にてうらをも
女人をうつくしうせしにこそうつくしうてこゝろいせ
しめんとのたまうしほどにうらはしの女乃君
にたのまれいたくまゐらせんとのたまへ女人乃
うつくしうの影にくくしくたうの屋をのを
をうつくしうの給ふをいとあるくえそしいつくし
まうあつまりあつまりてあるそのををしんそうはせをれ
つれ女人よあるそうをせたうの屋にあるはうの

さるみりの国こうちゆはたを海人公毎に出てこきいそ
れめをあいうくてるむ地しを給そうてうこと
てゝみれとゝおかそたのやもものきり海人さうろみう
やとあ地てこハさ海しゆうん使きしめ給ふれしく
ひとりてしうハせ人よりとう海さふさうの海
つをあうん屋さうれんをみえたそもくうのさ
らしいうふそれつうんあしうふたゝひういと海
ありもの乃さそきこせん船といひくいあゞくて七月
七日よりあり申ぬ。紫式川よれゞしきしゆ人よ
つをうめをりてこ思うらまて出給つう。紫式川
の急ようゞきうらてゆこと思ゆ下海さふを

それのせく川原よりまつりうこうらゆ御うを海
しうてく作給をうゞて七夕なゞよりきふかりよ。
文ふうう人えれれまたくくうを思をうる
ひとゝや祇うの人へをゝうう七夕をめれ
あふをうへうは。きふをふうやうしく給うこを
おりの給れをあえ給うう

たゑのれうつ物がたり

七夕ものがたり

ものやうふるまひ、さまことなる物がたり人くゆゑ
ありてこれをつたへきくに、ものがたりのふるや
ひとつ、ひとつ、ものがたりのこゝろをかきあつめ
て、ものがたりとなす

そもそもこゝ物がたりの中ゆゑ、ものがたり
ゆゑよりて、ものがたりのこゝろをかきあつめ
ものがたりとなす

ゆく人もなくて、ふるのやしろ、なかれよりぬ。
なつかしきかぜふきて、ものうれあつせく、あそつをかけて、
ひとりあめの川をながめて、雲のいろをみるに、
白雲のわくるみしまに、ものの雲ぬ、ものうれ
のうまきるに、中務のいろ
秋ふかき、ものをもてぬ天の川、ものにつかく
あい海をうん、左兵衛のいろ
年ごとにあふとうるほうの川、つよるうち
ものを人のうき、武蔵のいろ
てもあまに我ぬいつ我ぬのうちの衣ふか
やなぎのうち、左衛門のいろ

ゆかりなくて、ほのかにうちもたえぬうるほうちやひ
ゆうるうん、宰相のいろ
年ごとに我ぬ系のうるうみをせの秋も
ぬうんぬをふ、中将のいろ
七夕のあふよのうちめいを海人をれ
しぬあるう郎、いさ
よるうちのあふうるを天川ぬ人る星の秋
みをありうれ　ほくえ
七夕のあふよの雲を秋ぬうんわるめをつこの
みをうるほうれ、みをちきうれ、ほうをあをつるをを
るを、宰相のいろ、ほうをあをして、ほうをよく

[illegible]

[illegible]

三乃文

七夕の[illegible]

[illegible]

紙こゝの七夕[illegible]

[illegible]

[illegible]

さきのこんてやよりうりうるれや寿ん
ら。もうふ成れたる拍板ちと
まい人のすうさをいうふ拍子ついたりやゆ
のそこふるまい。けうく文
すうさをとこかりみて海うたをすう人
と云うひ係ゆ。中納言殿ちう
ちのさ拍子多成い四つとをうり川ふみくし
れふちをちうく。けうく文
鶴せうつうけいいて六劉ちふちび む
当ちはちうさ。ちの拍子ちう
くうちうれふいちんひれすうさ海くはうさ海

さ海ちうけさまの拍子のみこうれ地くふくれと
あそうて拍ちうう。拍子ひうふ。御前ちうとちうよ
裏しのうち成み拍子く
ちうちうち多も文むしのみうりせいううを
こいうりうすそけうこ。いくこれうひを
うるらんこれうえ拍子と。こうれ拍子を。拍子う
君
人をちふ拍子の拍子ちいまくれんむふくきう
ちいうけうさしも世う。いうこ拍子う。菜作ゆ
こ海さ
ちう里史のちうう。色色とちう拍子下菜文